**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第１８回　（２０１５年６月１６日）**

この勉強会はいつから始まりましたか？

（参加者）去年の６月１７日です。今日で１８回目です。

（１年間のポイントを振り返り）

・『福音』を何回も読んでください（☞第１回勉強会）

・単なる「読む」で終わらないでください（☞第１回）

・（私の考えでは）信者のために二つ種類の本だけで十分です。ひとつは真理の本『バガヴァッド・ギーター』そしてその実践の詳しいことが書いてある本『ラーマクリシュナの福音』（または『聖書』、『お釈迦様の教え』）

・『福音』には現代人の問題の解決が書いてある（☞第１回）

・教えを聞いてすぐに書かれた日記だから信頼性がある（☞第１回）

・教えの言葉だけでなく、教えの様子や周囲の状況の描写があるのは特別である（☞第２回）

・シュリー・ラーマクリシュナの教えはダイヤモンド、『福音』はベルベットのケースに入ったダイヤモンド。ダイヤをより美しく輝かせる（☞第１回）

・瞬間で変わるシュリー・ラーマクリシュナのさまざまなムード（☞第２回）

・１秒も神意識から離れない（☞第３回）

・さまざまな人びとを満足させることができた理由（☞第４～５回）

・霊性の師としてのシュリー・ラーマクリシュナの特徴（☞第６～１０回）

・甘い声、歌、踊りについて（☞第９回）

・シュリー・ラーマクリシュナのメッセージの特徴（☞第１０～１４回）

・シュリー・ラーマクリシュナは神様の化身（第１５回から前回まで）

そして今回から、シュリー・ラーマクリシュナの教えのメインポイント、大事な教えについて勉強をしていきます。本文はそのリストですが、詳しいことを今から説明していきます。

**・第１８回の勉強範囲：「第二版の出版のことばと序文」(11)頁**

・📖p(11)**シュリー・ラーマクリシュナの主な教え**

（読む）**・神を見ること（神の実現）と真我を知ること（真我の実現）は基本的に同じものであり、我々の人生の目的である。**

そう、それが人生の目的です。我々の人生の目的は、お金をかせぐ、身体の健康、家族、家、名声欲・・・それではない。

本当の目的は、神様、自分のたましい、真理（それらはどれも同じことです）それを悟ること。神様を悟る、自分の本性を悟る、真理を悟る（それらはどれも同じことです）それが人生の目的です。

（読む）**・神（真我）は至高の知識と至福の唯一の道である。源を悟らなければ、至高の知識と至福は望むべくもない。**

人生の目的は、神様を悟る、自分の本性を悟る、真理を悟る。なぜなら、それ以外に本当の至福を得る道はないからです。我々すべてが例外なく探す、楽しみ、至福、幸せ。それを得たいなら、神様の悟り、自分の本性の悟り、真理の悟り、その道しかない。それもシュリー・ラーマクリシュナの教えです。

（読む）**・こうした悟りには、神への愛着と世俗への無執着が必要である。価値の低い一時的なものをあきらめないかぎり、より高度で永遠なるものは得られない。**

では、悟りのための条件は何ですか？

条件は二つ必要です。ひとつは「世俗的なものに無執着」、もうひとつは「神様に愛着」（執着と言わないで愛着と言っていますね）。それがないと悟りは出来ない、自分の本性を悟ることはできない。

どうして？　小さいものをやめないと、大きなものをもらえないです。もし東に行きたいなら、西から離れないといけないです。

我々は、東にも行きたい、西にも行きたい。しかし東と西に同時に行くことは出来ますか？　我々はそれから離れたくない、あれももらいたい。しかし同時にそれはできないです。

問題は、このことをいちど理解しても、また「戻ってます」。信者になって、一歩東に行って、また三歩西に戻る（笑い）。その感じでしょう？　理解しても、頭で自分の目的は東に行くのだと理解しても、西へ行く、そしてまた戻る。そのとき前の場所に戻るのも大変になっています、一回後ろに歩くと、堕落すると。

しかし最初は理解が大事です。もちろん難しい、何回も堕落する可能性はありますが、気にしないで、また、がんばる。がんばって、一歩、二歩と行くと、少し進めます。その感じでだんだんと進めないといけないです。

（読む）**・霊性の実現に自己努力は非常に重要である。しかし最後は神の次第である。**

それもそうです。努力も絶対に必要です。我々は口だけになっています。霊的な実践のとき、我々は「神様にお任せ」と言ってときどき努力を怠ります。何が大事ですか？　それは自分自身の努力。すると神様の恩寵が出ます。

（参加者）「人事を尽くして天命を待つ」

そう、そのことです。何もしなければ神様の恩寵は出ない。

子どもは遊びに夢中なあいだ、お母さんは来ない。遊びをやめて「おかあさーん」と泣くとお母さんはやってくる。

（読む）**・僧（出家）には内的および外的放棄が必要とされるが、家住者（在家）には、聖なる交わり、祈り、内的または精神的放棄、すなわちこの世への執着を捨てることが必要とされる。**

ふつうの信者は質問します、私は放棄しないといませんか？　放棄することは難しい、無理です、と。我々は、放棄できないことの「言い訳」を言っているのです、「できないできない、そんなに（シュリー・ラーマクリシュナのように）放棄はできない」と。

しかしシュリー・ラーマクリシュナは、すべてを放棄せよとは言っていない。ホーリー・マザーも「中の放棄」と言っています。家住者のために外の放棄は必要ない。中の放棄をしてください。もちろんそれは簡単ではない。たとえば、世俗的な場所に行ってもその影響がなにも及ばないということ。たとえば、スワン白鳥。人間は水から出ると、身体は濡れたまま。しかしスワンは水から出て、羽をひと振りすれば、水滴はまたたく間に落ちる。スワンに水の影響がないように、世俗の環境に入っても影響は何もなし。それは簡単ではないが、無理ではない。外の放棄がなくてもできる。それを実践する。どのように私はスワンの状態になるか。

（読む）**・無執着を実践するには、永遠なる実在とそうでない非実在を識別する力を磨く必要がある。**

「識別」とは「何が一時的で、何が永遠か」ということです。

我々の大きな問題のひとつに、執着がありますね。それはどのように取り除きますか？

その方法のひとつが、「人間と人間のすべての関係は一時的、今生だけ、死ぬまでのものである」と識別すること。そして、「神様と我々の関係は永遠である」と識別すること。それがひとつの大きな考え、論理です。そのように考えると無執着になれます。とても深い関係があっても、その関係は今生まで、それがリミットです。それを忘れると必ず執着が生まれます。

人間関係においてはもちろん、愛をもってお世話しないといけません。しかし識別がなければ、執着という問題があらわれます。

執着のは何ですか？

（参加者）・・・。「私」のもの（という意識）。

もちろんそうですね。自分のものだから執着が出る。他人のものに、執着出ないですから。「私」のもの、それがベースです。

（参加者）ずっと近くにいたい、行きたい。

それは大きな特徴です。離れると、とても大きな苦しみ、悲しみ。ほかに？

（参加者）束縛。

束縛は執着の結果ですね。

（参加者）失いたくない。

（参加者）見返りを求める。同じくらい愛してほしい。

（参加者）自由がない。

自由がない、それも結果です。

もうひとつは、「私の愛した人は私だけ愛してください。私もその人だけ愛します」。これも執着の印ではないですか？　私の愛した人が、ほかの人を愛すると、すぐ嫉妬、ジェラシー。それはとっても狭い。ほかの人を愛すと私への愛が減るのではないかと心配します。私はできるだけ「一番」がいい。

それから、もうひとつは、「コントロールしたい」「私の好きなものを、私が愛した人も好きにならなければいけない」。そうしないと悲しみ。これはすごいエゴですね。私の好きな飲み物、食べ物、遊びをその人も好きにならないといけない。私の好きな場所にその人も行かなければならない。そうしてくれないと、苦しみ、悲しみ。

・私だけ愛してほしい。

・私もその人だけ愛する。

・コントロールしたい。

・私の好きなものを、私が愛した人も好きにならないといけない。

しかし、神様について、同じ感情があると、レベルはとても高くなります。

　愛の中でも、母親の子供に対する愛はとてもハイレベルですが、それは他人の子どもに対しても同じように接することができるでしょうか？

スワーミー・シヴァーナンダジの両親の例をお話します。

シヴァーナンダジのうちは裕福でした。遠い親戚に貧しい家庭があったので、その子どもたち（１０人くらい）を自分の家庭で育てていました。彼らは、自分の息子と親戚の子どもたちを全く区別しなかった。全員同じ食事、同じ服。自分の息子だからと言って特別なことは全くしなかった。ほかの親戚がそれを見て、少しいぶかったほど。

これが、執着がない愛の、ひとつの例です。これはふつうですか？　ふつうではない、とっても特別。しかし例があります。Love without attachment.

（読む）**・神について読んだり、聞いたりするだけでは十分ではない。規則的に、誠実に、とりわけ神を見たいという憧れをもって修行せねばならない。**

これは、家住者だけでなくお坊さんのためにも大事です。

神様についての話を聞く、それで霊的になる。これは間違った考えですね。霊的な本をたくさん読む、それで霊的になる。全くそうではない。実践、すなわち、神様のことを集中して考える、集中して祈る、無執着を実践する、清らかになるための実践をする、そのような霊的な実践をしない限り、霊的にはなりません。読むだけ、考えるだけ、話を聞いただけでは霊的にはならないです。

毎日の日課に、祈りや瞑想の時間があるから祈ります、瞑想します。しかし、「憧れ」がなければあまり結果は出ない。マシンのように瞑想し、ジャパを１０８回唱えても、あまり結果は出ません。そしてそういった状況に信者がなる可能性はとても高い。瞑想をする、ジャパをするだけでは十分ではない。『福音』に、何回も何回も「憧れ」のこと、ありませんか？

世俗的な例を使いますけれども、夫婦間でお世話をしていますが、毎日のスケジュールに従うだけ、お世話がだんだんマシンのようになったりしませんか？　最後まで、ハートのフィーリングをもってお世話を続けるのは、とってもチャレンジです、簡単ではない。

ハートのフィーリングがなくなる。信者にも同じ可能性があります。単なる日課、スケジュールの一部となる可能性がある。そうならないように気を付ける。これはチャレンジです。

『福音』にはその状態になると、あまり進めないとあります。ある場所まで進めるが、その先は進めない。

では、「憧れ」を保ち続けるために、どうするか？

毎日のやり方に変化をつけると多少結果が出ます。バクティ・ヨーガの実践をしているが、今日はギヤーナ・ヨーガの実践をしよう。

また、ホーリー・マザーやラーマクリシュナの弟子たち、聖者たちの生涯の本を読む。そこからもインスピレーションをもらうことができます。そのときには、『福音』と『バガヴァッド・ギーター』だけではなく、回想録、伝記などを読むと、新しいインスピレーションをもらう可能性があります。おお、すごい、素晴らしい。すると新たな憧れが生じます。

協会の例会のレクチャーを聞いてもその時も可能性があります。New hearing new inspiration.

巡礼や聖なる交わり（holy company）も助けます。

新しい熱意。それがないと霊性の生活がだんだんとドライになる可能性がある、モノトーンになる可能性がある。せっかく霊的な人生のアイデアはあるのに、実践のインスピレーションがわかなくなっている。ですから新しいインスピレーションをどのように得るか、これを覚えておいてください。「憧れ」や「ハートのフィーリング」がないまま機械的な霊的実践を２０年３０年続けても、レベルは上がりません。

（読む）**・神には制限はない。神に限界をもうけてはならない。**

ああこれがほんとに特徴です。

いつも、我々は神様について、「神様そういうもの、こういうもの」とジャッジメントばかりしています。神様は形がある、無い、そのコメントをしたり、議論したりしている。シュリー・ラーマクリシュナはとても美しいことを言っています、「神様は形がある、そして神様は形がない」。

　わかりますか？　我々人間は形があります、ですから形があるものは分かります、形がないものもわかりますね。しかし、形があるものも神様、ないものも神様。つまり「神様は形がある」の上、神様は形がない」の上！　我々の知識の理解のレベルの上、それが神様の存在です。

いつも我々は、自分の理解のレベルで、神様はそれですか？　これですか？　と考えています。しかし、神様は、理解のレベルの上です。理解を超越しないと分かりません。自分の理解で神様をリミットしないでください。自分の理解で神様を測らないでください。いつも我々はそう、哲学もそうです。シュリー・ラーマクリシュナの大きな助言は、「自分の理解のレベルで神様を測らないでください」。

シュリー・ラーマクリシュナはどんな例を使いましたか？

「１グラムのポットに、１キロの牛乳を入れる」。

我々の理解は、まさに１グラムのポット。神様、本当は１キログラムではない、無限です。しかし我々はすぐうぬぼれる。聖典を勉強して、少し実践をして、そして議論、闘い。

我々の理解がどれほどでしょう、我々の知性は１グラムのポットです、いや、１グラムもない。それなのにうぬぼれてすべて理解したように思う。

　もうひとつの例は、アリとなに？

（参加者）砂糖の山。

そうです、『福音』の中に出てきます、「アリと砂糖の山」。

我々はアリ。砂糖の山を見つけて、たったひと粒でお腹いっぱいになっています。家に帰るとき、別のひと粒を口にくわえ運び、持ち帰っています。今度来たときには砂糖の山全部を持って帰ろうと考えながら。

神様は限度無いです。我々は有限です。どうして有限なものが無限なものを知ることができるでしょうか。霊的な実践に必要ならばできるだけ努力して理解します、しかし、神様のすべてを理解することは我々にはできない。それは、うぬぼれの理解です。

（読む）**・信仰の数だけ道がある。**

これはとても有名です。これはシュリー・ラーマクリシュナの特徴です。ほかの聖者はあまり、このように言っていません。彼らは自分が悟った方法で信者を教えています。時にはそれだけが正しいと言っています。この方法だけに従ってくださいというのは割とあることです。仏教の聖典を読んでみてください、これだけ教えると言っています。シュリー・ラーマクリシュナはそれではない。いろいろな方法がある、信仰の数だけ道がある、と言っています。『バガヴァッド・ギーター』の中にもそのアイデアはあります、さまざまなヨーガを選んでくださいというものです。そのように考えれば、宗教間の闘いはなくなります。

考えてください、多くの人にとって宗教が人生の支えになりました。しかし、多くの人の支えになったのと同じ宗教が、多くの人を殺す、その源となっているではないですか？　キリスト教徒はどれくらいほかの宗教の人を殺しましたか？　イスラム教徒もどれくらい人を強引に改宗させ、殺しましたか？　歴史をみればすぐ分かります。アメリカ、南アフリカ、オーストラリア、昔からの先住民を殺して強引に住みました。お寺が壊されたならまだＯＫ、建て直すことができる、しかし考えてください、とても古い本と知識が入っている大きな図書館、それをイスラム教徒は燃やしました。アレクサンドリア大図書館、古い宗教のとても有名な図書館です。これがファナティシズム（狂信的。自分の宗教だけ正しいとする考え）の結果です。考えてください、建物が壊れてもまたつくることはできます。しかし、本、知識、それはできない。考えてください、どれくらいロス、損失か。日本でもそれがありました。明治時代、仏教のお寺やその図書館などが燃やされました。

シュリー・ラーマクリシュナの言うことはとてもおもしろいです。すべての宗教の中に、ミス、過ちの可能性もあります。ヒンドゥ教も例外ではない。

ヒンドゥ教の聖典の中には『プラーナ』（Purana(s)神話の書物）などいろいろあります。もちろん『ウパニシャッド』『バガヴァッド・ギーター』は例外ですが、それ以外の聖典に間違いの可能性はあります。我々は、いちばん正しい聖典の勉強をしていますが、ヒンドゥ教の聖典は我々が勉強しているものだけではないです。

シュリー・ラーマクリシュナが使った例。「みな、自分の時計だけが正しいと考えている」。私は確認しましたよ、電波時計でも示す時間はバラバラでした。では、何が正しいのか？　太陽です、太陽は正しい。

シュリー・ラーマクリシュナはこのことを言いました。「So many faith, so many path.　信仰の数だけ道がある」──あなた、自分の宗教の道に一生懸命従ってください。すると最後に神様が導きます。間違いがあっても気にしないでください、しかしほかの宗教を批判しないでください。

我々の問題は、「自分の宗教に一生けんめい従ってません、ほかの宗教を批判してます」（笑い）

英語で美しい表現がある──Why do you throw stones to others though yourself living in glass house.（なぜあなたはガラスの家に住んでいるというのに、人びとに石を投げるのですか？）また、『聖書』の中にもあります──How can you say to your brother, 'Brother, let me take out the speck that is in your eye,' when you yourself do not see the log that is in your own eye? （なぜあなたは、あなた自身の目の中に木片があるというのに、ひとの目の中のおがくずの小片を除こうとするのですか？）

ほかの人の問題を取り除きたい、自分に過ちがたくさんあるというのに。ほかの人の過ちを批判しています、自分の過ちを見ずに。──そうしないでください。

（読む）**・自分の信仰に誠心誠意従うこと。しかし他者の信仰を軽蔑することなく、敬意を払うこと。**

そうです。しかし我々はそれに従ってない。従えたら本当に喧嘩はなくなります。

（福音』勉強会第１８回、以上）